

小學毛筆臨本解說全

圖書	種目	國圖
	番號	/
	部冊	/. //
	購求年月	

T1A3
70E94
(H62M)



小學毛筆書臨本解說

目次

第一章、臨本の配當

第二章、用具、及用法

第三章、教授の方法

臨書

寫生

圖案

第四章、教授の心得

第五章、每學年教授法

要旨

程度及時間

臨本

用具

方法

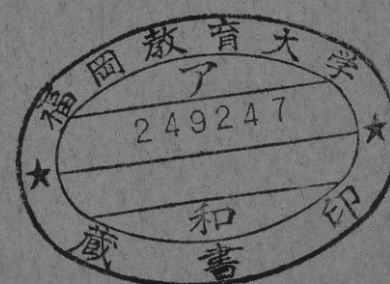
臨書

寫生

圖案

附書題一例

注意



小學毛筆書臨本解說

緒言

一、凡う小學校自在畫の、目的とする所は、兒童をして、眼と手を練習して、高尚優美の情操を生じ、百般人事の應用を計り、發明想像の能力を養成するに在り、兒童は、小學校以前、既に遊戲に於て、人工の妙を賞じ、天然の美を愛じ、又自から其模倣を爲すを樂む、今之を導くには、先づ正格なる良畫を規範とし、其應用を實物に求め、人工天然の衆妙百美を、收得して以て、各自特有の眞情美感を、自在に發揮せしめんことを要す

一、正格なる良畫は、兒童をして、靈妙の眞情を感動せしむるに在れば、流派に論なく、古今を問はず、博く精妙幽蘊を采らざるへからず、又之を擇ふは、兒童本然の、美想を開發するに在れば、理學的法則を以て束縛せず、専ら自在畫の本旨に基き、用筆の簡なるものより、繁なるものに及ぶへし、流派及理學的法則は、完全圓滿なる、兒童をして、天然の發達を阻碍し、一種不活潑なる、機械的となるの恐あり、豈に深く鑑みざるへけんや

一、手腕の運用をして、健壯快活ならしむるには、懸腕直筆に在り、懸腕は手腕を自由にし、直筆は筆端を自在にす、懸腕直筆ならされは、人工の妙、天然の美に對し、目迎へ心怡ふも、其高妙深美を、己か手中に入るゝこと能はざるへし、故に懸腕直

筆ならざる畫は、氣力少なく、精神乏しくして、無味賤俗のものとなるものなり

一、懸腕直筆のことは、獨り圖畫の上にのみならず、苟くも手腕に關する技術に於て、普通一般に通ずる、必然の法則なれば、人工天然の、高妙深美を盡したる圖畫に依り、其手腕を練習せしめば、百般の人事に於て、應用自在變化如意其鴻益限なけん。是れ普通教育上、尤も注意すべき要點なり。

一、幼稚なる兒童は、心意眞素にして、毫も矯飾習癖なければ、尋常科第一學年より、之か薰陶をなすときは、其發達敏捷にして、純然たる美質の氣概を、養成することを得るものなり。

一、以上は本臨本を編し、併せて教授法を録し、尋常科第一學年より、高等科第四學年に通貫したる所以なり。

一、教授法は、詳細別項にあり、宜しく就て參考せんことを冀ふ。

明治廿六年十二月

編者誌

小學毛筆畫臨本解說

第一章 臨本の配當

一、本臨本を分ちて、十四卷とし、尋常科第一學年より起り、高等科第四學年に終る、而して高等科第三四學年は、用器畫法を併せ教授するか故に、一卷つゝとし、他は二卷つゝとす

一、每卷十二圖を載するものは、小學校畫學の修業時間は、一學年四十週とし、内凡二十週を臨畫に充て、一週二時の積りを以て、毎週に一圖或は二圖を習得せしめ、他の二十週は、寫生圖案に充つることとなしたるものなり

一、凡る習畫の順序は、先づ線畫を習得し、而して後ち濃淡を施すものなれば、第一卷より第八卷までは、線畫にして、第九卷より第十四卷までは、濃淡畫とす

一、線畫は、先づ單純なる縱横圓直の線を以て、物の形狀を、作ることを習熟し、而して後ち肥瘦剛柔の線を以て、物の性質を、畫き表はすに至るを順序とす

一、濃淡畫は、先づ平面濃淡を以て、墨色の配合染法を習熟し、而して後ち渲渾濃淡を以て、向背遠近凸凹明暗を畫き分つに至るを順序とす

一、若し線畫に於て、肥瘦剛柔の線を先にし、又濃淡畫に於て、渲渾濃淡を先にするか如きことあらは、用筆用墨の靈妙精美の在る所を、悟得せしむる能はずして、唯一時の塗抹に屬し去らんのみ、故に殊に注意せざるへからざる所なり

今左に臨本を、各學年に配當す

一、尋常科第一學年

第一卷 物形を假りて、直線を示す

第二卷 全、直線曲線を示す

一、全 第二學年

第三卷 物形を假りて、線の結合を示す

第四卷 全

一、全 第三學年

第五卷 簡單なる形体を示す

第六卷 全

一、全 第四學年

第七卷 簡單なる形体に依り、肥瘦剛柔の線を以て、其物質の趣きを示す

第八卷 全

一、高等科第一學年

第九卷 簡單なる形体に依り、平面濃淡^{メリツブシ}を以て、墨色の配合を示す

第十卷 全

一、高等科第二學年

第十一卷 簡單なる形体に依り、平面濃淡^{メリツブシ}及び雲華濃淡^{ウソノダシ}を示す

第十二卷 簡單なる形体に依り、渲渾濃淡^{シヅカ}を以て、向背遠近凸凹明暗を示す

一、全 第三學年

第十三卷 諸般の形体に依り、完全なる圖畫を示す

一、全 第四學年

一、全 第三學年

第十三卷 諸般の形体に依り、完全なる圖畫を示す

一、全 第四學年

第十四卷 全

以上の如く、配當すと雖ども、若し或學年より、之を施用せんとするときは、其生徒既修の力を計り、適宜臨本を配當して可なり

●第二章 用具及用法

一、用具は、筆、墨、紙、鉛筆、燒筆（木炭）、羽箒、水鉢、小皿、及び繪具とす

（一）筆は、毛筆（線畫筆）、濃淡筆、渲渾筆とす

筆は、凡う其中央を持し、之を直立し、懸腕を以て、之を運用すへし、決して腕を机席に着け、或は指頭を以て、筆端を左右するか如きことあらむへからず、これ筆勢の自在を妨け、圖畫の精神を失ふものなれはなり、用い終れば、必ず洗ひ置かしむへし、これ毛尖の自在と、其の保存に益あればなり

（二）墨は、成るべく、精良のものを宜しとす

墨は、徐々に磨り、磨り了らば、暫ありて用ゆへし、これ水と墨と、能く熟合して、工合尤も宜きものなり、毎回必ず硯を洗ひ、決して宿墨を用ゆへからず、これ宿墨は生潤の美を失し、平滑の作用を妨くるものなれはなり

（三）紙は、普通半紙にて可なりと雖ども、成るべく「ドウサ」を引きたるものを用ゆへし、これ墨の浸潤することなく、安心して畫くことを得るものなれはなり、但し濃淡畫に至りては、必ず「ドウサ」引半紙を用ゆへし

（四）鉛筆は、下圖を作るに用ゆるものにして、其質の柔軟なるも

のを良しとす、鉛筆は尤も軽く用い、淡く畫かしむへし、「ゴム」を以て、其筆痕を消磨することは、堅く禁すへし

(五) 燒筆(木炭)は、下圖を作るに用ゆるものにして、其質の柔軟なるものを良しとす、燒筆(木炭)は、其一端を筆尖の如く、削り用ゆるものなり

(六) 羽箒は、其羽毛の、柔軟なるものを良しとす

羽箒は、燒筆(木炭)にて、下圖を作りたるとき、軽く掃ひ、僅に形体を表はし置き、淨寫の後、全く掃ひ去るへし

(七) 水鉢は、白色なるものを良しとす

水鉢は、筆を洗ふに用ゆるものなり、用い終らは必ず洗ひ置くへし

(八) 小皿は、白色なるものを良しとす

小皿は、墨又は繪具を、調合するに用ゆるものなり

(九) 繪具は、朱墨の如く、製したるものを良しとす

第三章 教授の方法

一、教授の方法は、之を分ちて、臨畫、寫生、圖案の三種とす

一、第一、臨畫法 臨畫は臨本に依り、運筆の練習をなし、其高妙の規範を、收得せしむるものにして、其用筆着墨の法を知り、兼ねて其趣致情味を悟り、自然に、靈妙の情感を生せしめんとを要す

之を導くには、先づ運筆法より形狀に及ぼし、進んで情致に及ぶを宜しとす

尋常科第一二學年の、幼稚なる生徒に於ては、手腕未だ熟せず

ふを宜しとす

尋常科第一二學年の、幼稚なる生徒に於ては、手腕未だ熟せず

して、形狀を構成するの力なければ、臨本の上に、半紙を置き、其上より鉛筆にて、假線を畫き、後ち毛筆にて淨寫せしむ、尋常科第三學年より、高等科第四學年に至るの間は、直ちに半紙に假線を以て、下圖を定め、後ち淨寫せしむるものとす

一、第二、寫生法。寫生は實物に依り、其形狀を看取し、天然深美の在る所を、知得せしむるものにして、臨畫に於て得たる力を應用して、其姿態情致を收拾し、自然に、微妙の情感を興さしめんことを要す

實物は、先づ近易なる形体に依り、其形狀を寫生し、進んで情致に及ぶを宜しとす

尋常科第一二三學年は、寫生の豫習として、黑板面或は白紙に、大きく畫き示し、之に依り、鉛筆にて假線を畫き、後ち毛筆にて淨寫せしむ、尋常科第四學年より、高等科第四學年に至るの間は實物に接し、其姿態情致を寫し取らしむるものとす

一、第三、圖案法。圖案は自己の意匠に依り、一種の發明をなさしむるものにして、臨畫及寫生に於て、得たる力を應用して、其本然の思想を自在ならしめ、自然に、幽妙の情感を表發せしめんことを要す

意匠は、各自特有の天性に屬するものなれば、少くとも他より制肘すへからず、唯だ纔かに作例を示し、其爲す所に任すを宜しとす

尋常科第一學年より、高等科第四學年に至るの間、臨畫及寫生の程度に伴ひ、畫題を設け、工夫圖案せしむべし

但し、第五章每學年教授法中、其學年の末項に、畫題の一例

を、臨本に依り示せり、尙ほ寫生に付ても、同様畫題を類推して、撰ふへし。

以上三種の方法を以て、廣く其應用を知らしむるときは、本科の主旨を、全ふするに庶幾からん、妄りに臨本を與ふるのみにて、放任し置くか如きは、兒童天然の眞情美感を發達せしむるに於て、其缺くる所實に尠少なからずとす。

第四章 教授の心得

一、教授は、最も謹嚴靜肅にして、精神をして専ら、畫の上に注かしめ、而かも自由に於て、眞の美想と一致せしむへし。

一、教授に當りては、必ず先づ、其教ゆべき圖様の何たるを試問し、知らざる箇所は之を教へ、次に其畫法を十分に會得せしめ、而して後ち着手せしむへし。

一、用具は、成るべく靜に出納なさしめ、既に出し畢らば、机上一定の地位に、正しく排置し、毫も亂雜ならしむへからず。

一、姿勢を正すへし、姿勢正しからされば、眞正なる運筆をなすこと能はず、故に筆を下すの前、先づ姿勢を正すは、最も必要なりとす、即ち体と頭は、成るべく直くせしめ、胸を机端に着け、眼を近く注くか如き弊なからしむへし、且つ左肘を机上に當て、左肩を下げ、頭を傾け、或は低く垂るゝか如き、或は右肩を上げ、右臂を机上に附くる等は、嚴禁すへし。

一、教師は、毎に注意周到なるべきなり、臨本及畫紙は、回轉傾斜せしむへからず、一旦畫き初めたるときは、改寫せしむへからず、黑板上に畫き示すときは、尤も謹慎して畫き、一

一教師は、毎に注意周到なるべきなり、臨本及畫紙は、回轉傾斜せしむへからず、一旦畫き初めたるときは、改寫せしむへからず、黑板上に畫き示すときは、尤も謹慎して畫き、一

線一點の、苟くもすへからざることを示すへし、倉卒に筆を下して、數を貪るへからず、必ず丁寧綿密に學習せしむへし、攄して生徒をして、自發自得せしむるやう、教導すへし
一、教授は、全級必ず、同一にすへし、一には説明の便あり、一には生徒自他の、技倆を比較し、大に競争の念を起し、進取の氣を勵ますものなり

一、成功の後は、必ず月日姓名を記せしむへし、圖様の工合を計り、右或は左に於て、何月何日臨畫(寫生又は圖案 姓名を、正しく記し置かしむへし

一、毎回必ず、評點を附し、之を返付すへし、其優等なるもの二三枚を取り、之を教室に掲示すへし、これ大に獎勵心を起さしむるの益あり、又時々全生徒の、圖畫を保存し置き、新舊を比較し、一は其進歩を徴し、一は其獎勵の方便となすへし

●第五章 每學年教授法

一、尋常科、第一學年

一、要旨、本學年は、畫學の基礎なる、直線曲線を教ゆるものにして、教授の初步なれば、主として生徒の、姿勢に注意し、正しき觀察と、熟練を得せしめんことを要す

一、程度、及時間

一、臨畫、直線、曲線 四十時

一、寫生、全 二十時

一、圖案、全 二十時

一、臨本、臨本は、第一卷、第二卷に依り教授す

一、第一卷は、直線の練習をなし、第二卷は、曲線の練習をなし、兼て直線の補習をなすものなり

一、用具、用具は、「ドウサ」引半紙、鉛筆、毛筆、の三品とす
一、方法、

一、臨畫、臨畫は、先づ臨本の上に、半紙を置き、上より鉛筆にて、假線を畫き、後ち半紙を取り、毛筆を以て、臨本と對照し、淨寫せしむへし、

一、寫生、寫生は、既習の臨畫の、程度に依り、臨本の内外より、材料を撰ひ、黑板面或は白紙に、大きく畫き示し、生徒をして、臨畫の力を應用して、半紙に假線を以て、之を寫し取らしめ、後ち淨寫せしむるものとす

一、圖案、圖案は、既習の臨畫及寫生の程度に依り、畫題を撰ひ、生徒をして、自己の工夫に依り、先づ鉛筆にて、半紙に草案を定めしめ、後ち淨寫せしむるものとす

附、圖案畫題の一例

第一卷に付き

- (一)、第一圖の、平線二個を、畫かしむ
- (二)、第二圖の、霞四線なるものを、畫かしむ
- (三)、第三圖の、山形を二線増して、畫かしむ
- (四)、第四圖の、縱横線に、横線一個を増し、畫かしむ
- (五)、第五圖の、縱横線に、横線一個を増し、畫かしむ
- (六)、第六圖の、紋形二個を、畫かしむ
- (七)、第七圖の、三角形三個を、畫かしむ
- (八)、第八圖の、四角形を、斜に畫かしむ

(八)第八圖の、四角形を、斜に畫かしむ

- (九)第九圖の、菱形を縦に、畫かしむ
(十)第十圖の、井桁を、斜に畫かしむ
(十一)第十一圖の、家の柱の間に、平線を付け、畫かしむ
(十二)第十二圖の、富士山の霞、一線を増し、畫かしむ

第二卷に付き

- (一)第一圖の、六角形、二個を畫かしむ
(二)第二圖の、八角形、二個を畫かしむ
(三)第三圖の、旭に霞、一線を増し、畫かしむ
(四)第四圖の、菱井桁を、縦に畫かしむ
(五)第五圖の、草形を、離して畫かしむ
(六)第六圖の、月に霞の、月の昇りたる所を、畫かしむ
(七)第七圖の、鳥居は、畫紙を縦にして、畫かしむ
(八)第八圖の、笠は畫紙を縦にして、畫かしむ
(九)第九圖の、垣根に、縦線一個を増して、畫かしむ
(十)第十圖の、蛇の目、二個を畫かしむ
(十一)第十一圖の、標札は、畫紙を縦にして、畫かしむ
(十二)第十二圖の、紋形二個を畫かしむ

一、注意　本學年は、専ら觀察運腕の練習にして、物形を、構成するものに、非らされは、彼の一定の順序を示して、此線を第一に、此點を第二に、第三第四には、此線此點と、云ふか如き、繁雜なる法則を以て、束縛すへからず、唯た初步のことなれば、授業に當りては、先つ一線を、黑板面に畫き示し、生徒の畫き了るを待ちて、又次の一線を畫き添へ、徐々に全圖を整へしめ、以て自然に、畫法を悟得せしめんことを要

す。

一、尋常科、第二學年

一、要旨 本學年よりは、前學年に於て、直線曲線の、畫法を練習したれば、漸く物形を、構成する楷梯として、線の結合を教ゆるものとす

一、程度、及時間

一、臨畫、單形

四十時

一、寫生、全

二十時

一、圖案、全

二十時

一、臨本、臨本は、第三卷、第四卷に依り教授す

一、第三卷、第四卷、共に線の結合を、練習するものにして、物形を假りて、直線と直線、曲線と曲線、直線と曲線、の結合を示せり

一、用具、用具は、前學年に同じ

一、方法

一、臨畫、前學年に同じ

一、寫生、前學年に同じ

一、圖案、前學年に同じ

附、圖案畫題の一例

第三卷に付き

- (一)、第一圖の、菖蒲形の葉、三枚づゝなるものを、畫かしむ
- (二)、第二圖の、扇子の中央に、丸を入れ畫かしむ
- (三)、第三圖の、傘に丸を入れ、傘印としたる所を、畫かしむ
- (四)、第四圖の、旭の霞を、離れ昇りたる處を、畫かしむ

(四) 第四圖の、旭の霞を、離れ昇りたる處を、畫かしむ

(五) 第五圖の、家に、入口のある處を、畫かしむ

(六) 第六圖の、丸を、三つ連ねたる處を、畫かしむ

(七) 第七圖の、門の下に、長き平線を畫き、地面を示せさしむ

(八) 第八圖の、繪馬の丸を省き、隨意の紋を、畫かしむ

(九) 第九圖の、紋形を、二個隨意に畫かしむ

(十) 第十圖の、紋形を、二つに離したる處を、畫かしむ

(十一) 第十一圖の、霞を一線、其下に加へ、畫かしむ

(十二) 第十二圖の、霞を二線にて、畫かしむ

第四卷に付き

(一) 第一圖の、霞に日の、少し懸りたる處を、畫かしむ

(二) 第二圖の、葦の小さき分を、其左に加へ、畫かしむ

(三) 第三圖の、松の中の短線、五つある所を、畫かしむ

(四) 第四圖の、籠目の線を解き、隨意の形を、畫かしむ

(五) 第五圖の、千鳥二羽、行列の所を、畫かしむ

(六) 第六圖の、浪四個を離して、畫かしむ

(七) 第七圖の、家根の上に、月の昇りたる所を、畫かしむ

(八) 第八圖の、草四個に、露三個の處を、畫かしむ

(九) 第九圖の、寶を縦にても、横にても、隨意に畫かしむ

(十) 第十圖の、紋形の短線を、反對に附け、畫かしむ

(十一) 第十一圖の、櫻の中の長線の先に、一點宛付けしむ

(十二) 第十二圖の、重扇子を、重ね變へ、畫かしむ

一、注意　本學年は、線の結合を、教ゆるに至ると雖、前學年の諸練習は、常に補習せしめんことを要す

一、尋常科、第三學年

一、要旨、本學年よりは、前學年に於て、線の結合を、練習したれば、漸く簡單なる物形を、畫くことを教ゆるものとす

一、程度、及時間

一、臨畫、簡單なる形体

四十時

一、寫生、全

二十時

一、圖案、全

二十時

一、臨本、臨本は、第五卷、第六卷に依り教授す

一、第五卷、第六卷、共に、單純なる線を以て、簡單なる形体を示せり

一、用具、用具は前學年に同じ

一、方法、

一、臨畫、臨畫は假線を以て、位置形狀を整へ、而して後ち、

毛筆にて淨寫せしむへし


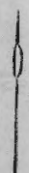
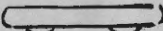
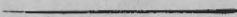





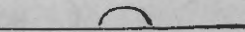
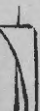
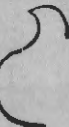
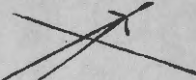
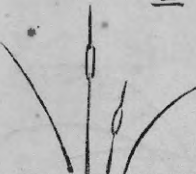

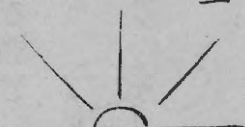
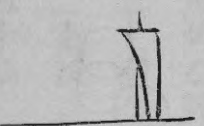

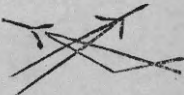
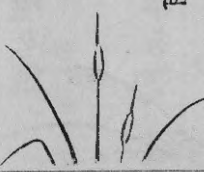
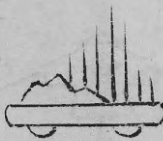
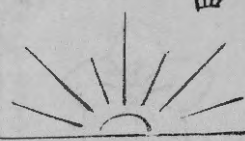
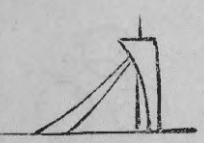

但し位置を定むるには、先づ紙面の廣狹を見積り、紙中物形を布置すべき、適應の地位を求むるものとす、又形狀を整へるには、位置定まりたる後ち、其大小長短の平衡を求め、其全形を定むるものとす、而して後ち、實線を施し、以て齊然たらしむるものなり

凡る物を造るには人工天然を問はず、必ず順序あり、順序乱るれば、其物完成せず、畫も亦た物形を畫くに至りては、自然の順序あるなり、今左に臨本に依り、物形を畫くの順序を示す

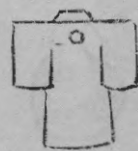
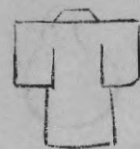
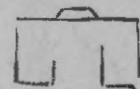
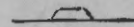
第五卷、第六卷に付き

書くの順序を示す

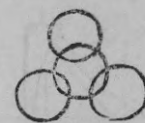
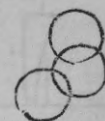
第五卷、第六卷に付き

第五卷 第一圖	第二圖	第三圖	第四圖	第五圖	第六圖
一 	一 	一 	一 	一 	一 
二 	二 	二 	二 	二 	二 
三 	三 	三 	三 	三 	三 
四 	四 	四 	四 	四 	四 

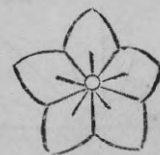
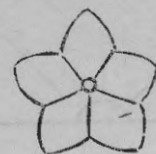
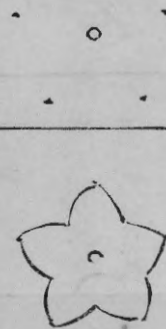
第七圖



第八圖



第九圖



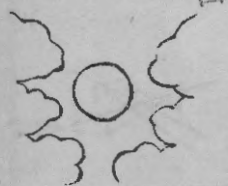
第十圖



第十一圖



第十二圖





第六卷

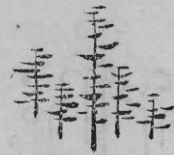
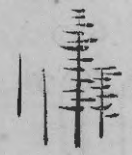
第一圖



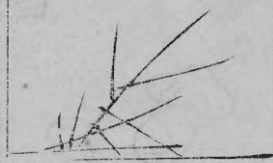
第二圖



第三圖



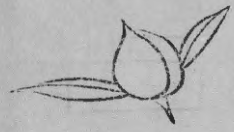
第四圖



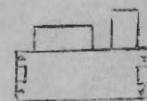
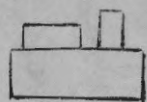
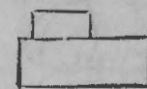
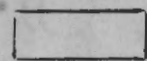
第五圖



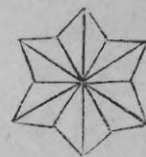
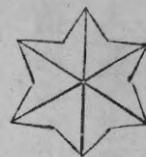
第六圖



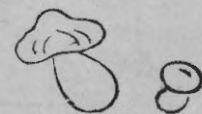
第七圖



第八圖



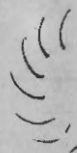
第九圖



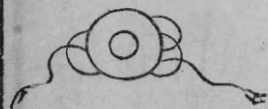
第十圖



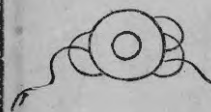
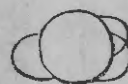
第十一圖



第十二圖



第士圖



一、寫生、寫生は、臨畫の程度に依り、臨本の内外より、材料を撰ひ、黑板面、或は白紙に、大きく畫き示し、生徒をして、假線を以て、其位置形狀を、寫し取らしめ、後ち淨寫せしむへし

一、圖案、圖案は、臨畫寫生の程度に依り、畫題を撰ひ、生徒をして、自己の工夫に依り、假線を以て、位置形狀を定めしめ、後ち淨寫せしむるものとす

附、圖案畫題の一例

第五卷に付き

- (一)、第一圖の、松葉を、離したる處を、畫かしむ
- (二)、第二圖の、蒲の葉を、一枚増したる處を、畫かしむ
- (三)、第三圖の、石菖の葉を、二枚増したる處を、畫かしむ
- (四)、第四圖の、太陽に、光線五本なる處を、畫かしむ
- (五)、第五圖の、舟の左に進む處を、畫かしむ
- (六)、第六圖の、達磨の右向の所を、畫かしむ
- (七)、第七圖の、着物の紋を、隨意に入れ、畫かしむ
- (八)、第八圖の、輪を、六個組ませたる處を、畫かしむ
- (九)、第九圖の、桔梗形の、外廊線を、直線にて畫かしむ
- (十)、第十圖の、彌之助の紋を、隨意に入れ、畫かしむ
- (十一)、第十一圖の、薄の、葉を増して、畫かしむ
- (十二)、第十二圖の、月の、雲に掛りたる處を、畫かしむ

第六卷に付き

- (一)、第一圖の、垣根の、縦線八個なるものを、畫かしむ
- (二)、第二圖の、家に、路の線七個なるものを、畫かしむ

(三)、第三圖の、林の樹木、一本増したる處を、畫かしむ

(四)、第四圖の、水に葦の葉、一枚増したる處を、畫かしむ

(五)、第五圖の、梅花の置様を、變へ畫かしむ

(六)、第六圖の、桃の方向を變へ、畫かしむ

(七)、第七圖の、烟草盆の火鉢と、灰吹を取り變へ、畫かしむ

(八)、第八圖の、麻葉形、二個を隨意に、畫かしむ

(九)、第九圖の、松葦の位置を、變へ畫かしむ

(十)、第十圖の、蕨形四個にて、隨意に畫かしむ

(十一)、第十一圖の、毛蔓形を、反對に向け、畫かしむ

(十二)、第十二圖の、鼓の紐、を隨意に畫かしむ

一、注意 位置は、今より之を授くる、甚た難さか如しと雖も、位置は意匠經營を立つるの、尤も肝要とする所なれば、其始めに於て注意せされは、終に習弊となり、脱去すること能はさるに至るへし、故に故らに束縛することなく、生徒自然の進歩に隨ひ、徐々に此の習慣を得せしめんことを要す、

一、尋常科、第四學年

一、要旨 本學年よりは、前學年に於て、物形を畫くことを練習したれば、漸く毛筆の特有なる、肥瘦剛柔の線を以て、物質に隨ひ、其趣を畫き表はすことを教ゆるものとす

一、程度、及時間

一、臨畫、簡單なる形体

四十時

一、寫生、全

二十時

一、圖案、全

二十時

一、臨本、臨本は、第七卷、第八卷に依り教授す

一、寫生、全

二十時

一、圖案、全

二十時

一、臨本、臨本は、第七卷、第八卷に依り教授す

一、第七卷、第八卷は、共に物質に随ひ、肥瘦剛柔の線を以て、其趣を示せり

一、用具、用具は、「ドウサ」引半紙、燒筆、羽箒、毛筆、の四品とす

一、方法、

一、臨畫、臨畫は、前學年に同し

一、寫生、寫生は、簡單なる實物に依り、其形狀の大要を寫し取らしむ、先づ燒筆を以て、其下圖を定め、後ち淨寫せしむるものとす

一、圖案、圖案は、前學年に同し

附、圖案畫題の一例

第七卷に付き

- (一)、第一圖の、三日月の、雲に掛りたる處を、畫かしむ
- (二)、第二圖の、草五本に、露三箇を、畫かしむ
- (三)、第三圖の、蝶を正面に、畫かしむ
- (四)、第四圖の、蕨を隨意に置き換へ、畫かしむ
- (五)、第五圖の、瓦の缺けたる處を、隨意に畫かしむ
- (六)、第六圖の、蝸牛の角の、方向を變へ、畫かしむ
- (七)、第七圖の、梅の荅を、一個増して、畫かしむ
- (八)、第八圖の、椿の葉の方向を變へ、畫かしむ
- (九)、第九圖の、筆の置方を變へ、畫かしむ
- (十)、第十圖の、掛物の紐を、隨意に畫かしむ
- (十一)、第十一圖の、櫻の葉の方向を變へ、畫かしむ
- (十二)、第十二圖の、白と杵を離して、畫かしむ

第八卷に付き

- (一)、第一圖の、若松の置様を變へ、畫かしむ
- (二)、第二圖の、折鶴に松葉を添へ、畫かしむ
- (三)、第三圖の、澤潟の置様を變へ、畫かしむ
- (四)、第四圖の、蓮根の置様を變へ、畫かしむ
- (五)、第五圖の、弓矢の、置様を變へ、畫かしむ
- (六)、第六圖の、兜の紐を變へ、畫かしむ
- (七)、第七圖の、柳の枝の、組様を變へ、畫かしむ
- (八)、第八圖の、紅葉の置様を變へ、畫かしむ
- (九)、第九圖の、浪を、隨意に畫かしむ
- (十)、第十圖の、千鳥一羽を増して、畫かしむ
- (十一)、第十一圖の、梨子を一個離して、畫かしむ
- (十二)、第十二圖の、蓮花の草を増して、畫かしむ

一、注意　物質の趣とは、雲の如きは軽く、瓦の如きは堅き様を云ふ、之を畫き表すに、其物質により、相應の心持を以て、肥瘦剛柔の線を、施さんてを要す、但し肥瘦剛柔の線を、畫くに當り、連腕熟せざる時は、指頭を以て、筆端を左右するは、普通の常なれば、能く注意して、堅く禁す可きなり、是れ懸腕直筆に背く故なり

一、高等科、第一學年

一、要旨　本學年よりは、前學年に於て、線畫の諸法を練習したれば、漸く平面濃淡^{メリツプ}を以て、簡單なる用墨の法を教ゆるものとす

一、程度、及時間

一、程度、及時間

一、臨畫、簡單なる形体、附平面濃淡、四十時

一、寫生、全、二十時

一、圖案、全、二十時

一、臨本、臨本は、第九卷、第十卷に依り教授す

一、第九卷、第十卷は、共に簡單なる形体につき、平面濃淡を施し、用墨の法を示せり

一、用具、「ドウサ」引半紙、線畫筆、燒筆、羽箒、濃淡筆、水鉢、小皿、（繪具）

一、方法、

一、臨畫、臨畫は、先つ圖の線を、是迄の如く畫き、次に墨を皿に移し、水と調合して、臨本の如く、平に染めしむ

一、寫生、寫生は、前學年に同じ、

一、圖案、圖案は、臨畫及寫生の程度により、畫題を撰ひ、生徒をして、自己の意匠を以て、圖案せしむ

附、圖案畫題の一例

第九卷に付き

（一）、第一圖の、紅葉の方向を變へ、畫かしむ

（二）、第二圖の、澤瀉を、徑五六寸の圓内に、畫かしむ

（三）、第三圖の、梅花を、二輪増して、畫かしむ

（四）、第四圖の、紅葉模様の、葉三個、實二個にて、畫かしむ

（五）、第五圖の、唐團扇の置様を變へ、畫かしむ

（六）、第六圖の、栗の實を、一箇増して、畫かしむ

（七）、第七圖の、花の置様を、變へ畫かしむ

（八）、第八圖の、椿の葉一枚を減じて、畫かしむ

(九) 第九圖の、柿の枝を、隨意に伸し畫かしむ

(十) 第十圖の、菊を圓内に、畫かしむ

(十一) 第十一圖の、枇杷の實、二個を増して、畫かしむ

(十二) 第十二圖の、桔梗を圓内に、隨意に畫かしむ

第十卷に付き

(一) 第二圖の、落葉に蝸牛の方向を變へ、畫かしむ

(二) 第二圖の、酸漿の方向を變へ、畫かしむ

(三) 第三圖の、薔薇を、徑五六寸の圓内に、畫かしむ

(四) 第四圖の、鳥に落葉を添へ、畫かしむ

(五) 第五圖の、夕顔の蔓を、隨意に變へ、畫かしむ

(六) 第六圖の、片輪車の置様を、變へ畫かしむ

(七) 第七圖の、水仙の葉の、組様を變へ、畫かしむ

(八) 第八圖の、山水畫の樹木を、一本増して畫かしむ

(九) 第九圖の、梅により、適宜の一枝を、畫かしむ

(十) 第十圖の、蓮の圓を省き、畫かしむ

(十一) 第十一圖の、美人草を、圓内に畫かしむ

(十二) 第十二圖の、茄子の置様を變へ、畫かしむ

一、注意 平面濃淡は、濃淡畫の基礎なれば、最も用意精密な

らんとを要す、特に墨色の濃淡を、明に分つことを務め、班痕を生じ、線外に漏出せざる様、注意すべし、但し、本學年より、彩色を用ゆるときは、色は實物に依りて、之を染め、配色の工合は、臨本に依るべし。

一、高等科、第二學年

一、要旨 本學年よりは、前學年に於て、濃淡の初歩を、練習

一、要旨、本學年よりは、前學年に於て、濃淡の初步を、練習

したれば、簡單なる、雲華濃淡、及び渲渾濃淡を以て、向背遠近凸凹明暗を、畫き分つてを教ふるものとす

一、程度、及時間

一、臨畫、簡單なる形体、附雲華濃淡、渲渾濃淡

三十時

一、寫生、全

三十時

一、圖案、全

二十時

一、臨本、臨本は、第十一卷、第十二卷に依り教授す

一、第十一卷は、簡單なる形体につき、渲渾濃淡の楷梯なる、雲華濃淡(第二第五第七第十一圖)を示し、兼て平面濃淡の補習をなす

第十二卷は、渲渾濃淡を施し、向背遠近凸凹明暗を示せり

一、用具、「ドウサ」引半紙、線畫筆、燒筆、羽箒、濃淡筆、渲渾筆、水鉢、小皿、(繪具)、

一、方法、

一、臨畫、臨畫は前學年の如く、先づ圖の線を書き、次に雲華濃淡にありては、初め淡墨を施し、其乾くを待て、順次濃墨を重ね染めしむ、渲渾濃淡にありては、初め渲渾さんとする處に、渲渾筆を以て、水を平に引き、次に墨を施し、渲渾筆を以て、適宜に渲渾さんむ、但し渲渾をなすときは、二本の筆を指間に持ち、使用することをなすべし

一、寫生、簡單なる實物に依り、其形狀性質を寫取り、これに濃淡を施さんむ

一、圖案、前學年に同じ

附、圖案畫題の一例

第十一卷に付き

- (一)、第一圖の、菊模様の花薺を、適宜に組合せ、畫かしむ
- (二)、第二圖の、浪花模様の、置様を變へ、畫かしむ
- (三)、第三圖の、紅葉の中、二三枚を離して、畫かしむ
- (四)、第四圖の、富士の山を、徑五六寸の圓内に、畫かしむ
- (五)、第五圖の、梅丸模様を、隨意に畫かしむ
- (六)、第六圖の、薔薇の葉の、方向を變へ、畫かしむ
- (七)、第七圖の、景色の、柳一株と家一個を増し、畫かしむ
- (八)、第八圖の、蝶を二個、適宜の位置に、畫かしむ
- (九)、第九圖の、杜若の葉、五枚なるものを畫かしむ
- (十)、第十圖の、芙蓉を圓内に、適宜に畫かしむ
- (十一)、第十一圖の、花模様の、置様を變へ、畫かしむ
- (十二)、第十二圖の、山水を、圓内に畫かしむ

第十二卷に付き

- (一)、第一圖の、羽箒に、香合を離して、畫かしむ
- (二)、第二圖の、筍を隨意に、畫かしむ
- (三)、第三圖の、景色の、雲及び雁行を、隨意に畫かしむ
- (四)、第四圖の、芭蕉を、一邊五六寸なる方形内に、畫かしむ
- (五)、第五圖の、黃蜀葵を、圓内に畫かしむ
- (六)、第六圖の、葡萄の實を、五個増して、畫かしむ
- (七)、第七圖の、蝶に、櫻花を添へ、畫かしむ
- (八)、第八圖の、牡丹に、小蝶を添へ畫かしむ
- (九)、第九圖の、菊模様を、隨意に畫かしむ

(八) 第八圖の、牡丹に、小蝶を添へ畫かしむ
(九) 第九圖の、菊模様を、隨意に畫かしむ

(十) 第十圖の、景色を方形内に、畫かしむ

(十一) 第十一圖の、柳に鷺を、方形内に、畫かしむ

(十二) 第十二圖の、景色を圓内に、畫かしむ

一、注意 本學年は、圖畫の諸法を、教へ了る時なれば、渲渾の如きは、一層の綿密を加へ、特に懇切の教授を要す

一、高等科、第三學年

一、要旨 本學年よりは、前學年に於て、圖畫の諸法を、練習したれば、漸く完全畫を教ゆるものとす

一、程度、及時間

一、臨畫 諸般の形体、附濃淡 二十時

附、(用器畫法) (十時)

一、寫生、全 三十時

一、圖案、全 二十時

一、臨本、臨本は、第十三卷に依り教授す

第十三卷は、諸般の形体に付き、其性情趣致を示せり

一、用具、用具は前學年に同じ

一、方法、

一、臨畫 前學年に同じ

一、寫生、實物の情致を、寫生するには、花鳥山水の論なく、其情致の在る所を、眼目として寫生し、其餘は省き捨つるものとす、例令へは、梅の枝は、左右に蔓り、其一枝に小鳥の止まりたるを見て、其意を寫さんと思はし、其一枝の小鳥を、眼目として寫生するなり、其餘の枝は、全く省き捨つると云ふにはあらねども、唯た多少を採りて用ゆるの

意なり、これ其枝を悉く寫生すれば、主要とする眼目の意を失ひ情致のある所を、寫し出すこと能はさるものなり

一、圖案　圖案は、臨畫及寫生の力を應用して、自己の意匠に依り、一種の圖畫を、新案せしむ

附、圖案畫題の一例

第十三卷に付き

- (一)、第一圖の、能面の紐を、適宜に畫かしむ
 - (二)、第二圖の、雲丸模様を、隨意に畫かしむ
 - (三)、第三圖の、蟹に海草を、隨意に、畫かしむ
 - (四)、第四圖の、浪に千鳥を、方形内に畫かしむ
 - (五)、第五圖の、草に紅葉を、隨意に畫かしむ
 - (六)、第六圖の、鯉魚の水草を増し、畫かしむ
 - (七)、第七圖の、松に鳩を、圓内に、畫かしむ
 - (八)、第八圖の、梅に雀を、方形内に、畫かしむ
 - (九)、第九圖の、景色を圓内に、畫かしむ
 - (十)、第十圖の、牛に綱をつけ、畫かしむ
 - (十一)、第十一圖の、鴈を方形内に、畫かしむ
 - (十二)、第十二圖の、山水に月を添へ、圓内に、畫かしむ
- 一、注意　物体の性情趣致につき、其美妙のある處を悟得せしめ、以て雅致あるものと、無味なるものとの差別を、暗に判斷せしめんことを要す

一、高等科、第四學年

- 一、要旨　本學年は、前學年に次ぎ、完全畫を教ゆるものとする
- 一、程度、及時間

一、程度、及時間

一、臨畫 諸般の形体、附濃淡

二十時

附、(用器畫法)

(十時)

一、寫生、全

二十時

一、圖案、全

三十時

一、臨本、臨本は、第十四卷に依り教授す

第十四卷は、諸般の形体に付き、其性情趣致を示せり

一、用具、前學年に同し

一、方法、

一、臨畫、臨畫は前學年に同し

一、寫生、寫生は前學年に同し

一、圖案、圖案は前學年に同し

附、圖案畫題の一例

第十四卷に付き

(一)、第一圖の、紙雛に依り、隨意に畫かしむ

(二)、第二圖の、牡丹模様 に依り、隨意に畫かしむ

(三)、第三圖の、蛤に依り、隨意に畫かしむ

(四)、第四圖の、景色に依り、隨意に畫かしむ

(五)、第五圖の、蓮に鵲鵲に依り、隨意に畫かしむ

(六)、第六圖の、犬に依り、隨意に畫かしむ

(七)、第七圖の、浪に鷺に依り、隨意に畫かしむ

(八)、第八圖の、人物に依り、隨意に畫かしむ

(九)、第九圖の、花車模様 に依り、隨意に畫かしむ

(十)、第十圖の、紅葉と鳩に依り、隨意に畫かしむ

(十一)、第十一圖の、鴛鴦に依り、隨意に畫かしむ

(十二)第十二圖の、人物に依り、隨意に畫かしむ

一、注意、本學年は、最終の年なれば、廣く善美の根底を養ひ、本科の主旨を、全ふせんを要す

以上、尋常科第一學年より、高等科第四學年に至るの間、種々の方法を以て、圖畫の原則を、盡く擧げたれば、習熟の後には、天地間、形象あるもの、皆我心の思ふまゝに、筆動きて、滯ふることなきと共に、百般の人事に、其力を應用し、人間の本分を盡すに於て、其裨益少なからざるを期す、其効果の大小は、教師の注意と、生徒の勉強如何にあるのみ

明治廿六年十二月廿五日印刷
明治廿六年十二月三十一日發行

定價金五錢

明治廿七年三月十七日文部省檢定濟

編輯
兼畫者

香川縣平民

日岡鶴



東京市本郷區駒込
追分町三番地寄留

發行兼
印刷者

東京府平民

中川三吉

東京市牛込區原町
三丁目十六番地

發賣元

神戸書店

東京市京橋區
南紺屋町七番地

彫刻者

木邨德太郎

東京市神田區旅籠町
壹丁目七番地

圖書 和圖書 遡



a1380816551a

福岡教育大学蔵書